
抱きしめさせて

蕊 芳森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

抱きしめさせて

【Nコード】

N4926P

【作者名】

蕊 芳森

【あらすじ】

シンプルなラブストーリーです。

あの日の君はあまりにも疲弊していて、その心も崩壊寸前だった。片町のスクランブル交差点で、突然歩みを止めて、うずくまりながら嗚咽している君を、僕以外の通行人たちは、気にも留めずに歩き去っていった。

かなりアルコールも入っている様子で、身なりから言って、水商売系の女性だったから、尚更のことだったのだと思う。

他人の言動や感情には一切関与しない、ということが、この街の中で定められた、暗黙のルールなのかもしれないと思う。

それをするなら自己責任の範囲内で行うこと、みたいな。

奥能登で長い時間生活していた僕は、まるでそういった決まりごとの意味を理解できずにいた。

よって、この状況に不自然さばかりが募る一方で、そうまるで、試されているような、見極められているような、そんな架空の視線を感じたりしていた。

そんな想いが瞬時に交錯し、結局僕は君に肩を貸し、とりあえず、信号を渡りきろうと促した。

君はあの日、自分が勤務していた某高級クラブで、売り上げが3ヶ月連続下降していることを知らされ、事実上の戦力外通告を受けていたのだという。

かつての片町ナンバーワンホステスも、いったん輝きを失うと、貧相な扱いを受けるものだと言っていた。

彼氏だと思い込んでいた同郷の恋人にも、決別を告げられ、「もうどん底、死にたい。」などと大声で連呼している。

相当、酒を飲んでいる様子で、このまま放っておく訳には行かない。僕は自分用に抑えていたホテルに、君を無理やり押し込んで、自分はさっさと、JRで七尾の実家まで帰ることにした。

友人との交歓もキャンセルして帰らないことには、こんな揺れてフ

ラフラした思いのまま、久しぶりの友人と逢つても、楽しい話ひとつもできないであろう。

半年ぶりの金沢をもう少し楽しみたかったけど。

元来田舎者の僕は、こういういかにも都会の影みたいなシチュエーションを、最も苦手とする。

何処から来て、何処へ流れて行くやもしれない、そんなストレンジヤーで溢れた空虚な街…。

僕は、君をベッドまで見送った後、そのまま帰路に就こうとした。

しかし、自分自身のあまりにももの慟哭から、これで君の人生が凋落していくような、そういうイメージを抱いてしまった。

もちろん、愛だの恋だの、そういう感情など持ち得ない。持ち得るはずがないじゃないか。

もし、君が劣悪な生活環境で、頼りになる存在すらないのだとしたら、そう思うと、僕は思わず意外な行動をとってしまった。

ホテルのメモ紙に、僕の携帯の番号を書き、その下に、「深酒禁止。片町&香林坊立ち入り禁止。」と書いて、部屋を去った。

君の動向など知る由も無かった。

と言うか、君のことを思い出すことすらなかった。

振り返ってみると、我ながらお人好しな行動をとったものだ、今は素直に笑える。

金沢程度の街で、こんな刺激を受ける自分であるから、到底東京や大阪みたいところで暮らすのは厳しいものがあるね。

都会には都会のよさがあり、地方には地方のよさがあるって、昔から言われてるけど、それが両極化してる現在の形が案外バランスとしては一番良いのかな、とか思ったりする。

無いものを求めて、行き来できるということが、素晴らしいではないか。

今になって思えば、君もそんな都市での生活に自分を埋没させ、大切なものを見失っていた、そんなひとりだったのかもしれない。

厚生年金会館でのコンサートで、ふと見かけた女性の顔を見て、僕は目を疑った。

長い黒髪の女性の顔は、まさしく片町で泥酔していた君のそれだった。

さすが元片町ナンバーワンホステス。

その容姿の端麗さに、思わず息を呑んだ。

そして勇気を持って、恩人づらして、声をかけてみようと思った。ただ口説くのは、面白くない。

どうせなら嗜好を凝らして、外国人のフリをして声をかけよう。

僕「ソコノウツクシアナタ。カタマチ・コウリンボウタチイリキンシジャンカッタデス力。ジョセイノオサケノミスギ、ミットモナイデス。」。

彼女「あ、あの時の!？」

僕「Do you remember me？」

彼女「Yes. Where are you from？」

さすが元ホステス、英語は流暢だ。

もうここは、頓挫だ。

僕「Oh, I've got my fated girl. というのは冗談で、僕は日本人です。」

彼女「それくらい分かりますよ。ナンパとはいえ、逢うの2回目ですし、しかも1回目は大変お世話になりましたし（笑）。」

僕「いやいや、こんな綺麗な人だっけ知ってたら、ホテルに放り込んで帰ったりしなかったのにな（笑）。」

それから開演までの1時間僕たちはいろんなことを話した。

君の不幸な生い立ちや、水商売に傾倒していた時代への後悔などなど。

片町での僕との出会いをきっかけに、人を見る目が少しだけ変わったという君は、異性との関係でこれまで何度も辛い思いをしてきたそうだった。

職業柄、いろんな男性と出会っかけてかけがあり、好意をもたれるこ

とも実際多々あり、職務上冷たくあしらうこともできず、いつも心苦しい思いで、向き合ってきたのだという。

君が、自身の働く店での売り上げが落ちていた理由は、とある客の言動が原因だったかもしれないという。

その客というのは、自称君の恋人という触れ込みなのである。

高級クラブのナンバーワンホステスというくらいだから、社会的ステータスの立派な人間ばかりを相手に、高尚な会話ばかりをしないとわれがちだが、実際はそうではなく、そういった彼らも、美しい女性の前には、ただのオスに成り下がるのである。

想像しがたい札束を積み、「これで一晚どうだ？」などとの誘惑も茶飯事的にある。

君には、当時ふるさと静岡に恋人がいたため、この手の誘惑には一切応じようとしなかった。

しかし、ある日、その恋人から君に一通のメールが届いた。

「君はいつまでそんな暮らしを続けているんだ。遠く離れた街で、そんな仕事をしている君を到底受け入れられない。もう終わりにしよう。」

このメールで、気を落とした君は、例の富豪の客の誘惑に一度だけ乗ってしまったのである。

たかが一夜の過ちと思っていた彼女であつたが、そのスキャンダルが君を妬む他のホステスを介して、片町じゅうの噂になってしまったのだ。

相手の青年実業家にも妻子がいて、これまた彼の存在を面白く思わない内部の人間がいて、ふたりは見事に内部外部とも人間に画策され、その立場を凋落することになる。

彼は、自分の会社の会長職を奪われ、同時に家庭崩壊、まもなく離婚の調停が始まるうとしていた。

君は、その噂を聞いた高級クラブの店長から、重要な客の指名を一切与えないという、事実上の戦力外通告をくらった。

そんな、夜の出来事が、僕たちのファースト・コンタクト、出逢い

であつた。

君の寂しさに付け込んで、僕は心優しい友人を演じることを許された。

しかし君の悲しみや孤独を知るにつれ、僕は恋心すら忘れるほどの深い思慮を求められることを苦痛に思うようになっていた。

そんな君が唯一大切にしていた、信じられるもの、それは金^{かね}、ただそれだけであつた。携帯アフィリエイトで味を占めた彼女は、FX、株、と次々に投資を拡大し、最後は出会い系の結婚詐欺にまで手を伸ばすようになっていた。最初、自分も、その金づるとして向き合われているような気がしていた。しかし、騙されたフリをして、君を歪んだ世界から抜け脱すきっかけを与えてあげようと思った。こんな始まり、そして、こんな終わり方をやはり人は不自然に思うだろう。

あの頃僕にはちよつとした財源があつた。3年前から友人と共著で出しているビジネス書のシリーズがネット通販で密かなベストセラーとなっていて、その印税で、働かなくてもいいくらい収入があるのだ。とはいえ、僕らのビジネス書は、結果として、冒険ができる企業とそうでない中小企業の間、更なる格差を招くような内容であつたため、書店流通は見送ろうという運びになっていた。よつて、世間で健全と呼ばれているビジネス書の著者たちからは、格好の非難の材料とされていた。実際問題、僕自身格差社会を否定しきれないという持論を持っている。リスクを冒して事業を行う覚悟の企業には、それ相応の待遇や結果が待っていないとおかしい。そこで成功を招く手腕があつたことを無力な経営者にどうして否定できるのか。資本主義社会に身を投じて生業を立てているものなら、この感覚は、常識的に身につけていなければおかしい。それに対し、賃金が少ないだの、労働条件が劣悪だのと不平ばかり並べている、そんな方の経営の物差しを逆に伺いたいものだ。そこで何も語れないような人材なら、会社もその方を必要とは思わないことでしょう。そんな時代の歪みを、ある意味補っているのが、ITという根本的

な常識崩壊のメディアだったりする。その流れに乗りすぎても破綻、乗れなくても破綻、という恐ろしいメディアである。21世紀は、コンピュータの時代、これを使えないことには始まりません。というたい文句で始まった、このIT社会。

君もその時代を迎えようと自身の中に強く存在した美意識や道徳心を必死で崩壊させ、魂を悪魔に売った、悲しい女性だということを、僕は一目で見抜いたのである。僕は貧乏学生のフリをして君と交信を続けた。お金に関する話はタブーで、ROCKアーティストの動向や今後の音源がライブが楽しみだななどと、時も忘れて語り合った。

忘れてはいけない。僕の役目は心を金で売り買いしようとする君の目を醒まさせることなのだ。僕が君の悲しい過去に同調することには、今この時点では感情論的になり過ぎて、いいことは何ひとつ無いはずだ。しかし、君の心を紐解いていく中で、僕自身が君に対して偽ってしまふことがあるとしたら、逆に僕自身が君を騙していることになる。こうして思索を巡らす今も、僕は君のことで胸がいつぱいになっている。心を知り同調し、共感する、この一連の流れは、確かに恋愛感情の初期症状に他ならない。仮に僕が君を愛しているのだとしたら、やはり僕を取るべき行動は、変えてはいけなはずだ。君を取り巻く欲望の輩から、君を救い出すことが、何より大切なことなのだ。

僕はある日、勇気を持って告白した。

僕「僕は君を愛し始めている。これは確固とした思いで、揺らぐことはないと思うんだ。だけど、今君が、僕に隠れて取り組んでいる社会的に許すまじき行為を見過ごす訳にはいかない。僕の思いに添えてくれるなら、そっと抱きしめさせて欲しい。その心苦しい、胸の震えが届くまで。」

君は無言でうなづいた。頬を伝う涙を拭おうともせず、そっと僕の肩に手をかけて、寄りかかってきた。

君「もう戻れないの。無知な自分にも、純粹な自分にも。」

僕「それでいいんだ。もう自分を偽る必要はないんだ。もう君を傷つける奴は現われない。僕がそばにいるから。ずっとそばに。」

一年間こうした交歓が続けた後、僕たちは正式に交際を始めた。しかし、ふたりはお互いにまだ秘密を持ったまま過ごしている。君は、ネット詐欺等で稼いだ金を施設に寄付しすっからかんになっていること。僕はビジネス書で稼いだ金を、君がネット詐欺で被害に遭わせた方への慰謝料に充てたということ。お互いの心苦しい部分を紡ぎあつて、支え合つて、今日も一日それとなくやり過ごしている。今ここに在る全てが真実で確かなもの、そうお互いが思えることで、得られる安心というものが在ることをようやく、君もわかりかけているようだ。

ひとりで生きてはいけない。

喜びも悲しみも、その双方の傷みを、分け合えなければ歩いてはいけない。

We all can't live without someone.
We all can't walk without sharing joy and sorrow, and dual pain.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4926p/>

抱きしめさせて

2010年12月14日10時10分発行